

館林キリスト教会 デボーションノート（2007年）

7月 1日 今日の通読箇所 列王紀上 8章22～34

いよいよ神殿が完成した時、盛大な感謝金、祝賀会が開かれたが、一番大切だったのは、この神殿をきよめて神に献げる、献堂式だった。この章には、献堂式におけるソロモンの祈りが記してある。この祈りを読むと、神殿はたしかに「祈りの家」であって、ソロモンはこれから神殿に、個人の祈り、民族の祈り、悔い改めの祈り、祝福の祈りが、また収穫の感謝の祈りも、戦争の助けの祈りも、ささげられることを期待し、神が天からその祈りに答えて下さるように、願っているのである。

7月 2日 今日の通読箇所 列王紀上 8章35～45

ソロモン王の、献堂式の祈りがつづく。彼は今、念願の大事業を完成して、誇りと満足の絶頂のはずなのに、その祈りの態度の謙虚さには心打たれるのである。彼は王者でありながら、人間はすべて、彼をも含めて、罪多く、しかも災害の多い世に住むものであることを深く自覚している。それ故、民が悔い改める時はその罪を許し、災害や戦争の時に祈ったならば、救って下さるようにくりかえし祈っている。これを思えば、祈らずに生きようとする者の傲慢さが、つくづくと思われるのである。

7月 3日 今日の通読箇所 列王紀上 8章46～53

やがて彼らの子孫の国ユダヤは、重ね重ねの神に対する反逆のために、祝福を失い罪の罰を受けて、BC600年に滅亡する。人々は捕虜としてバビロンに強制移住させられるが、真剣な悔い改めの結果、50年後に帰国して、再びユダヤ国を建てることを許される。次に同じ事情のもとに、AD70年ローマのために滅ぼされ、以後二千年間、ユダヤ人は亡国の民として世界中に離散していた。しかるに第2次世界大戦後、次第に故国パレスチナに帰還した彼らは、1948年、三度びイスラエル共和国を建国して今日に至っている。その亡国はいつも彼らの罪の結果であるが、その民族の保護と国の回復は、歴史における奇蹟であって、ソロモンの祈りの答えであると言える。

7月 4日 今日の通読箇所 列王紀上 8章54～66

神の言葉である聖書に対して、選り好みをするわけではないが、特に折りあるごとに繰り返して読みたい所があるのも事実だ。王上8章のソロモンの祈りなども、時々読み味わうことをおすすめする。大切な祈りのお手本の一つだからである。今までひざまずいて祈っていたソロモンが、今度立ち上ると、全国

民を祝福する。人々のためにとりなしの祈りをささげ、一つまた立ち上って人々を指導する。これは王者、牧師、一家の父親など、上に立つ者の大切なつとめなのだ。

7月 5日 今日の通読箇所 列王紀上 9章1～14

世にソロモンほど幸運な者はいまい。父王ダビデは、神の恵みに支えられたとは言え、一介の牧童から身を起して国王となるには、たゆみない努力と経営をかさね、多くの苦勞と危険とをしのいだのである。しかるにソロモンは生れながらの王者であった。しかし与えられる物が多ければ、それだけ期待される責任も重い。神がソロモンの祈りに答えて下さるとともに、今改めてソロモンに命じ、神の前に心と生活を全うして、つつしんで与えられた王者のつとめを果たせよ。と仰せられたのは、真に至当なことであった。

7月 6日 今日の通読箇所 列王紀上 9章15～23

ソロモン王の治世に、神の祝福によって、イスラエルはいよいよ繁栄隆盛に向っていった。神殿宮殿の完成のあと、軍隊も軍事施設も次第に完備した。南方の港湾都市エジオンゲベルを占領して大船を建造し(おそらく資材も技術も外国から入れて)紅海からインド洋まで、新しく外国貿易を開始したのもめざましいことであった。しかし勢いがつけば行き過ぎも生ずる。国の事業もいつか王様の虚栄、ぜいたく、道楽につながってくると、国民の負担が増加する。注意を要するところだ。

7月 7日 今日の通読箇所 列王紀上 10章1～13

ここに言う「シバの女王」は、アラビア半島南部に栄えた古代王国の女王だと言われ、いろいろ面白い伝説もある。この女王の知恵と指導力、その王国の繁栄と宮廷のぜいたくなどは当時世にきこえ、ソロモン王と好一對の評判だったと思われる。その一方ソロモン王のところには、朝貢と交渉と、指導保護を求めるなどの種々な目的で、諸外国から王侯や使節の往来引きも切らず、丁度現代のワシントン・モスコーのようだった。しかしその中でも、シバの女王の来訪はもっともセンセーショナルな、ロマンチックなものだった。そして、この女王のエルサレムでの最大の収穫は「真の神」について学んだことだ、と記されているのである。

7月 8日 今日の通読箇所 列王紀上 10章14～29

人の長所は欠点に早がわりするし、成功は傲慢ぜいたくに脱線することによって、早くも衰微のもとをかもし易い。今、ソロモンの繁栄は王宮をぜいたくにした。盛んになって来た貿易も、民衆の生活には関係の少ない、戦車や軍馬な

どの軍需品や、王宮のぜいたく品の取り引きなどが多い。結局イスラエルは、中東地方における、軍需品、ぜいたく品の中央市場の観を呈して来た。この間ソロモンは抜け目なくもうけたろうが、これが神様のみ心であったかどうかは疑わしい。いわゆる「才人におぼれる」結果になる恐れがあった。

7月 9日 今日の通読箇所 列王紀上 11章1～25

この辺からソロモン王晩年の記事となる。長年の繁栄と安逸の間に、いよいよソロモンの弱点がはつきりして来たのは、悲しむべきことであった。昔から「英雄好色」と言うが、ソロモンも女性にチヤホヤされる人であつたらしい。また彼はソツのない外交家だったから、外国との友好のために、いわゆる結婚政策も行い、ソロモン王の後宮には、外国の王女も多かつたらしい。その結果、王宮の中にもそれらの国の神々が持ちこまれて、偶像礼拝とのけじめもゆるんで来た。そして次第に神の祝福を失い、国民の支持も失われて、そろそろ各方面に扇動家が活動する温床が生じて来たのであった。

7月10日 今日の通読箇所 列王紀上 11章26～43

ハタデは南方エドム王家の伝統の一人、レゾンは北オゾバの王の遺臣で、いずれもエジプトに亡命していたのが、ソロモン王の政治のゆるみと、国民の不満につけこんで、いま、いわゆる抵抗運動を起したのだ。ヤラベアムは、最初は一人の労働者であったが、実力があつたので次第に地位を得て、やがて有力な抵抗運動の組織者となった。預言者アヒヤは、彼の運動が、神の摂理のうちに、一応成功することを預言した。そしてその間、彼がいつもダビデ王の模範を見ない、ソロモンの失敗をくりかえすことのないように忠告したのである。

7月11日 今日の通読箇所 ピリピ人への手紙 1:1～11

「福音の交わり」

ピリピ人への手紙は4章、104節、5504字で組みたてられています。通読するのにわずか15分くらいで、新約聖書では比較的短い手紙です。ところがその内容の豊かさと深さは計り知ることのできないものがあります。主イエス・キリストの救いにあずかったパウロがどのように生きたか、自分の信仰体験を通して生き生きと述べられているからです。この手紙はローマの獄中で書かれたと言われています。7節には「わたしが獄に捕らわれている時にも、あなたがたをみな、共に恵みにあずかる者」と記されています。こうして11節まで、困難の中にあっても喜びの湧き出てくる「福音の交わり」に預かる素晴らしさを教えているのです。

7月12日 今日の通読箇所 ピリピ人への手紙 1：12～21
「福音の前進」

パウロは監禁状態でした。しかし、これさえも喜んでいました。なぜなら「パウロはキリストのために監禁された」と周囲の人々に知れ渡り、その結果、福音が広くローマに伝えられるに至ったからです。さらにまた、各地の兄弟たちに新しい確信を与えました。彼らは今までよりもっと大胆に、自由に、恐れないうみことばを語るようになったのです。さらに、パウロはどんな理由にせよ、このようにキリストが宣べ伝えられていることを喜びました。また、これらはパウロ自身の救いでもありました。神様の福音のお働きに役立ち、彼の霊的健康と幸福のためにも役立ったからです。パウロが常々願っていたのは、生きている間はこの監禁の結果のように、キリストが崇められること。またここで死ぬなら、永遠の栄光を獲得するのですから、それも幸いであり、有益だと告白しています。

7月13日 今日の通読箇所 ピリピ人への手紙 1：22～30
「福音に生きる」

パウロの願いは「この世を去ってキリストと共にいること」でした。しかし自分の願いより、神のみこころを優先すべきことをよく知っていました。そして祈りのうちにパウロは、教会の人々の信仰の成長と喜びのために、なお生きることが最善と導かれたのでした。パウロは獄中でこの手紙を記しています。クリスチャン生活は戦いであるということをよく知っていました。ですから信仰の戦いを守っていくために、第一に「福音にふさわしく生活」すること、つまり「節操ある生活」をすること。第二に「一つの霊によって堅く立ち」「一つ心になって」とあるように、一致協力していくこと。第三に、苦しむことをも含めて全ては神から来るのであるから、確信をもって歩むようにと勧めているのです。

7月14日 今日の通読箇所 ピリピ人への手紙 2：1～11
「キリストの謙卑」

獄中のパウロがピリピ教会に願ったのは、兄弟姉妹が心を合わせ一つ思いになることでした。「わたしの喜びを満たしてほしい(2節)」。それによってパウロは何物にも変え難い喜びに満たされるのです。「一つ思い」になるには「へりくだった心」が鍵です。パウロは5節以降に「へりくだり」の最高のお手本を挙げます。それこそキリストの謙卑のお姿です。キリストは神と本質的に一つであられますが「神と等しい」というこの事を固守したいとお思いになりませんでした。その全ての特権と正当な威厳をお捨てになって人間の姿になり、さらにへりくだって死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで謙遜と服従を貫かれたのです。このキリストをあなたがたの謙遜のお手本としなさい。

7月15日 今日に通読箇所 ピリピ人への手紙 2：12～18

「救いの達成」

12節で使われている「救い」は、義とされるという意味の「救い」ではなく、クリスチャンとしての成長を意味する「救い」です。パウロは、その救いの達成に努めなさいと言ったのです。そしてその志しを与え、願いをかなえてくださるのは神様なので、すべてのことをつぶやかずに、疑わずに、するように励ましたのです。この証しが全うされるためにパウロは3つのことを勧めています。その第一は「あなたがたが責められるところのない者となるように」、第二は「純真なものとなるように」、第三は「傷のない神の子となるように」、ということです。そうすれば、いのちの言葉を堅く握っているクリスチャンと教会は、この世の人々の間で輝き、栄光を現わすことができるのです。

7月16日 今日に通読箇所 ピリピ人への手紙 2：19～25

「同労者テモテ」

テモテはパウロの同労者、忠実な協力者でした。ある時は共に働き、ある時はパウロに派遣されて、地方の教会で働きました。今、テモテはパウロと一緒にいます。パウロはまもなく自分もピリピに行くつもりだが、その都合がつくまで、さしあたりテモテをピリピ教会に送りたいと書いています。ピリピ教会の様子を知って励まされたいという気持ちと同時に、教会にとっても、パウロとテモテの指導と奉仕が必要でした。パウロは「テモテがあなたがたのことを、親身に心に掛けていること、いつもキリストのみ心を求めつつ労苦していること、錬達した働き人で、子が父親に仕えるようにパウロと共に福音を伝えてきた」とテモテを推薦しています。

7月17日 今日に通読箇所 ピリピ人への手紙 2：25～30

「使者エパフロデト」

エパフロデトはピリピ教会の信徒です。彼は教会を代表して、贈り物を獄中のパウロに届け、パウロの手伝いをするためにピリピからローマまでやってきました。そこで彼は、ピリピ教会の人々の分まで奉仕しようと必死で働いたのですが、過労のために重態に陥ってしまいました。エパフロデトは、病気のためにパウロの役に立たず、教会の期待にも応えられず、またみんなに心配をかけたことを心苦しく思っていました。しかしパウロは彼を「わたしの同労者で戦友である兄弟、また、あなたがたの使者」と賞賛しています。パウロは病から回復したエパフロデトを、ピリピ教会に大急ぎで送り返しました。その時に、パウロが感謝の意を込めて彼に持たせたのが、この「ピリピ人への手紙」なのです。

7月18日 今日の通読箇所 ピリピ人への手紙 3：1～9
「価値転換」

パウロはかつて自分も執着し、いまもなおユダヤ人クリスチャンが特に陥りやすい「ユダヤ主義」を警戒しなさいと言っています。かつての「ユダヤ主義」時代のパウロは、律法が要求する義について落ち度のない者であると誇っていましたが、今はキリストを信じる信仰による義を受け入れ、この信仰に立脚していると証しています。3節で、「神様の霊によって礼拝し」「キリストを誇り」「肉を頼みとしない」すなわち「人間的な誇りを頼りにしない」ことが、真の信仰であると教えます。続いて彼のユダヤ教時代の誇りを数え上げ、有益でかつ輝かしかったこれらの誇りを今は損失と思い、ふん土と感ずると言います。なぜなら、パウロはキリストを信じた故に「キリストを知り続ける」貴重な特権、圧倒的な価値を得たからです。

7月19日 今日の通読箇所 ピリピ人への手紙 3：8～16
「キリスト者の生き方」

8節で、パウロはキリストを知る知識の絶大な価値を証しています。これはすべてのクリスチャンにとっても、大変価値のあるものです。それはパウロが、どんなに律法を守り善行を積んでも得られなかった真の救いを得、神からの義を受け、復活の力を知り、伝道の苦難によって主の働きに参加できる喜びを知り、死者の中から復活に達し得る確信と希望を持つことができたことによるのです。さらにパウロは、クリスチャンの生き方を、当時ギリシャで行われていた徒競走にたとえて、「後ろのものを忘れ、前のものに向かってからだを伸ばしつつ.....キリスト・イエスにおいて上に召して下さる神の賞与を得ようと努めている」と証し、勧めました。

7月20日 今日の通読箇所 ピリピ人への手紙 3：17～4：3
「国籍は天に」

パウロは「わたしたちキリストに従う者たちを模範にしなさい、なぜならキリストに敵対して歩んでいる者が多いから」と勧めています。日本の国籍を持つ人は、日本の法律の規制を受けると同時に、その法律によって保護されます。国籍が天にある者は、「神様のお言葉に従う」という生き方の規律があると同時に、同じ神様のお言葉のなかに、神様の保護と祝福が約束されているのです。さらに彼らは、主イエス・キリストの再臨とそれに伴う栄化の望みに生きる幸いを受けています。ですから、知らず知らずこの世の生き方に巻き込まれ、同化してしまうことがないように「主にあって堅く立ちなさい」と警告しました。また2節で特に、ピリピ教会の、ある二人に、一致と協力を保つよう願っています。

7月21日 今日の通読箇所 ピリピ人への手紙、4：4～9

「思い煩うな」

6節に「何事も思い煩ってはならない」とあります。母親は、子供が学校でいじめに遭ったりしなければよいか、受験生を持つ家庭は、希望する学校に合格できるかとか、父親は、仕事や生活等で思い煩ったりします。だれにも大なり小なり、心配事、不安、思い煩いはあります。問題は、これらの思い煩いに対してどのように対処し、処理するかです。パウロは6節後半で「ただ、事ごとに、感謝をもって祈りと願いをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい」と勧めています。祈りとは、神との会話、交わり、神に対する呼びかけです。ですからいつも祈りをもって、神のみこころに焦点を合わせて行く時、私たちの心に神の平安がもたらされ、それが生きる力となるのです。

7月22日 今日の通読箇所 ピリピ人への手紙 4：10～17

「キリストの充足」

パウロはピリピ教会の贈物に感謝し、彼らの、主の働き人を支える姿勢を喜んでいます。今回エパフロデトに託して届けられたピリピ教会の捧げ物は時期に適っていたのです。パウロが伝道を始めた最初から、パウロを忠実に支えたのはピリピ教会だけでした。しかし、パウロは、貪欲に物を求めるのでも、物質に左右されるのでもないと言います(11～13節)。貧しくても、豊かでも、飽き足りる時、飢える時、どのような環境でも、あらゆる状態に対処する秘訣を、キリストにあって習得した。だからどんなことにも耐えて、奉仕する用意があるのです。すなわち「私はキリストの充足のうちに自足しています」と。

7月23日 今日の通読箇所 ピリピ人への手紙 4：16～23

「かんばしい香り」

パウロは、ピリピ教会からの贈物が、パウロの必要を十分に満たしただけに留まらず、「それは、かんばしい香りであり、神の喜んで受けてくださる供え物である」(18節)と言って、これが同時に彼らの霊的祝福となっていることを述べています。「かんばしい香り」とは、旧約時代に献げられた燔祭が「神を喜ばせる」という意味で「こうばしい香りの捧げもの」と言われたことを引いています。同時に「燔祭」は献身を意味します。ある人は献金の祈りの時「献身のしるしとして」と祈りますが、ピリピ教会の兄弟姉妹もそうした気持ちで贈物をしたのです。だから神様は、この贈物をご自分に献げられた物としてお受け入れになったでしょう。ピリピ教会の贈物は、旧約時代に祭司が燔祭を神にささげる時のような、真心のこもった「かんばしい香り」の漂うものだったのです。

7月24日 今日に通読箇所 コロサイ人への手紙 1:1~8
「恵みと平安」

今のトルコにあったコロサイ教会は、パウロが程近いエペソに伝道した時、その伝道の波及の結果、近くにできた教会でした。しかしパウロ自身はこの教会を訪れたことはありません。その後パウロは獄中で、兄弟エパfrasからコロサイ教会の様子を聞いたようです。そしてコロサイ教会の信仰の励ましと指導のために手紙を書き送りました。それがこの聖書です。冒頭にパウロが、祈り心のうちに挨拶を記しています。2節「父なる神から、恵みと平安とがあなたがたにあるように」。私たちは「恵みと平安」を作り出すことは出来ません。それは神様が下さる賜物です。私たちの幸福は、その賜物の平安によるのです。平安が失われれば誰も幸福ではいられないでしょう。それゆえにこそ、パウロはこの冒頭の祈りを捧げたのでしょ

7月25日 今日に通読箇所 コロサイ人への手紙 1:9~14
「パウロの祈り」

活動的なパウロは今獄中にいます。彼はその時その場で出来ることに専心し、主に仕えていました。彼は訪ねて来る人に説教し、教会に手紙を書き、人々のために祈りました。12節まで続くこのパウロの祈りは、コロサイ教会に対する2つの嘆願を記しています。第一は、「神のみこころを深く知るように」という祈りです。私たちは、神を聞き従わせるような祈りに陥り易いので、祈る時に、神様が私たちに何を願っているのかに気づいて行くことが大切です。第二は、「主のみこころにかなった生活をして真に主を喜ばせるように」と言う祈りです。具体的には、「あらゆるよいわざに実を結び」、「神を知る知識を増し」、「神の力で強くされ」、「父なる神に感謝する」ように努めることです。

7月26日 今日に通読箇所 コロサイ人への手紙 1:15~20
「神の栄光の啓示」

私たちは神様を見ることはできません。しかし神様はキリストによってご自身を現されました。ヨハネ福音書1章18節には「神を見た者はまだひとりもいない。...ひとり子なる神だけが、神をあらわしたのである」。第二コリント4章6節には「キリストの顔に輝く神の栄光」とあります。キリストはもともと神ご自身であられ、万物の創造者です。万物はキリストにあって結び合わされ、秩序が与えられています。また頭が体の隅々に指示を送り体を生かしているように、キリストは教会のかしらです。キリストは十字架によって神と人のために真の和解と平和をつくり、また最初に死から復活して死に勝利を得られました。それゆえに彼は教会のかしらとなられました。尊いことではありませんか。

7月27日 今日に通読箇所 コロサイ人への手紙 1:21~29

「神との和解の目的」

私たちが救われたのは、私たちが立派で善い行いを積んだからではありません。私たちは「かつては悪い行いをして神から離れ」(21節)ていた者でした。しかし、神様は、このような私たちのために御子を死に渡すことで赦し、神様と和解させてくださったのです。それは私たちを「聖なる、傷のない、責められるところのない者」(22節)として神のみ前に立たせるためです。また、この救いの恵に預かった私たちが、ゆるぐことがなく、しっかりと信仰に踏みとどまり、人々の救いを願って宣教するためです。ローマの獄中でこのように記したパウロ自身も、口先だけで愛する者ではなく、身をもってキリストのからだなるコロサイ教会のために、喜んで様々な苦難を引き受け、主に仕えていたのです。

7月28日 今日に通読箇所 コロサイ人への手紙 2:1~7

「信仰の絆」

クリスチャンの歩みは信仰の絆でしっかり結びついていることが大事です。パウロはコロサイ教会の人々が、常に心を励まされ、お互いの愛によって固く結ばれるように、熱心に祈り勧めているのです。信仰が健全に成長していくと愛に満ちた交わりを生み出していきます。さらにこの交わりは信仰の確信へと導き、神の奥義なるキリストを知るに至らせるのです。だからパウロは、「キリストに根ざし」(7節)て歩むようにとも言ったのです。先日の聖地旅行で、荒涼としたシナイ半島の砂漠を通った時、アカシヤの木だけが道沿いにまばらに生えていました。この木は自分の高さの5,6倍にまで根を伸ばし、地下水から水を供給しているのだそうです。信仰の成長の秘訣を教えてください。

7月29日 今日に通読箇所 コロサイ人への手紙 2:8~15

「無効の証書」

神様は、私たちを責める証書を、規定と一緒に、キリストの十字架によって無効にし「わたしたちのいっさいの罪をゆるして下さった(13節)」のです。これは「キリストの割礼(11節)」を受けたと表されています。同時に洗礼(バプテスマ12節)に象徴される霊的な意味があります。第一は、キリストを信じる以前の古い自分は死んだということです。「肉のからだを脱ぎ捨てた(11節)」「彼(キリスト)と共に葬られ(12節)」たのです。第二は、キリストの命に新しく生まれたということです。「信仰によって、彼(キリスト)と共によみがえらされた(12節)」のです。第二コリント5章17節「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなったのである」の通りです。

7月30日 今日に通読箇所 コロサイ人への手紙 2:16~23
「キリストとの結合」

パウロはコロサイ教会に対して、ある人々の禁欲主義に警戒するように言いました。それは、彼らが食物や宗教上の様々な禁欲的規定をならべ、人々に励行を勧めていたからです。また、彼らはカリスマ的仲介者の霊力を借りての天使礼拝を主張し、幻を見たことで誇り高ぶっていたのです。しかしパウロは、これらがみな「ひとりよがりの礼拝とわざとらしい謙遜と、みせかけのからだの苦行」で、ほしいままな肉欲を防ぐのに、何の役に立つものではないことを指摘したのです。そして、それよりもかしらなるキリストとの結合こそ重要だと教えたのです。それはからだにあって多くの種類の器官や節々や筋肉が互いに働き、一致して力強い生命を保持するように、人はキリストに結び合わされて育てられ、生き生きと成長するものだからです。

7月31日 今日に通読箇所 コロサイ人への手紙 3:1~11
「新しい創造」

キリストを信じた者は、信仰によって、キリストと共に葬られ、キリストと共によみがえらされたのです。ですから上にある永遠の宝を目当てにしなさい。そこにはキリストが神様の右に座を占めておられます。キリストを信じた者の新しい命は、今は、キリストと共に神様の内に隠されています。しかし、やがてキリストが現れる時、彼らはキリストと一緒にキリストの栄光の輝きの内に現れるのです。パウロは「だから」(5節)と続けます。神様のみこころに敵対したかつてのような生活を捨て去り離れなければいけません。貪欲は「偶像礼拝」すなわち、神様の代わりに自分と被造物を神とする罪です。これに続く様々な罪を捨てなさい。なぜなら、キリストにある者は古い人をその行いと共に脱ぎ捨て、新しい人を着たのですから。